中一国語科通信

第4号
令和4年4月19日
国語科1年担当
堀之内・猿間・廣池

公園で遊びし吾子のおみやげのシロツメクサを空き瓶に挿す

十四歳の君へ　わたしたちの授業

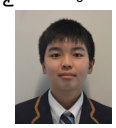
昨年度のものになりますが、宮崎日日新聞に掲載された作品を紹介します。

〈11月1日掲載〉
総合内科専門医
おおたわ史絵【保健体育】
「心と体の健康 挑戦に必要」
・何でもできるし、何にでもなれる
・心と体の健康を保つのが大事
・自分で自分をほめてあげよう

〈2月12日掲載〉
脚本家
渡辺あや【社会】
「役立つのは好感度より知恵」
・社会科はすぐに役立つ
・急に才能が開くことがある
・中学時代はつらくて当たり前

一組　佐藤友哉

まだ明確な夢はない。そのため今泉さんが言う「なぜという好奇心を持って」という言葉にはっとした。日々のちょっとした疑問をスルーしている気がしたからだ。小さな疑問が後々、自分の人生も左右する唯一無二の原石かもしれない。大事にしていきたい。



二組　岩切梨華

筆者は、毎日を真剣に生き、努力すれば必ず道は開ける、と言っている。今、私は隅々まで意識が届いた美しい踊りのため、日々頑張り、精神力、体力を鍛えている。今後は自己肯定感を高く持てるように、できている自分をほめ、バレエを通して興味を持った研究者になる夢をかなえたい。

〈11月1日掲載〉
動物学者
今泉忠明【理科】
「自分は自分 違い認めよう」
・「残念」でもいい
・疑問を持つのが大事
・そのままで大丈夫

二組　濵田茉希

「自己肯定感が高い」ことは自慢げなことと思っていたが、母に尋ねてみると「好感度など関係なく自分の意思を伝えられる、芯のある人を指す」と教えてくれた。偉人の行動は「知恵を働かせてこそ」のもので、好感度を求めてではない、と私は思う。だからこそ本当に必要なものを大切にしたい。

「百字の獅子」十一月

テーマは「茶」「合唱コンクール」「仕事（勤労感謝の日）」でした。各クラスから一作品ずつ紹介します。

〈茶〉
「魔法のドリンク」
一組　牧　桜子

寒い時期に飲みたくなるもの、それは紅茶だ。寒い朝に母がよく入れてくれる紅茶は、一口飲むだけで体が温まる、私にとって魔法のドリンクといっても過言ではない。母の紅茶を飲んで学校へ行く、これが私の日課だ。

▼体だけでなく、心まで温まってから登校する牧さんの様子が伝わってくる作品です。

〈合唱コンクール〉
「大舞台で歌う」
二組　岩原佑征

人生で初めて半九ホールという舞台で歌った。スポットライトに照らされると夢の中にいるようで、胸がときめいた。いざ歌い始めると、緊張を通り越して無心になり、最後まで歌い切ることができ最高の時間だった。

▼簡潔な表現でありながら、ステージに立ったときの興奮と感動がとてもよく伝わってきます。

コラムマラソン　最終回
「考える人に」
堀之内圭子

コロナのせいで学校行事が中止になったり、旅行ができなくなったりと、いろいろな楽しみを奪われていますが、ウクライナで砲弾に怯えている人々のことを考えると、そんなことで文句を言うのはなんだか申し訳ないという気持ちにさせられます。私たちが何かを我慢したからといって、ウクライナの人のためになるわけではありません。だからと言って、何も考えない、何もしないというのは違うと思うのです。日本は、そして私たちはどうあるべきか。傷ついた人たちのために何ができるのか……。国語の勉強は、そういうことを考える力を身につけるためにするのだと私は信じています。

〈勤労感謝の日〉
「子ども達も感謝されるべき！」
三組　谷村　怜

この日は、日々苦労して働く人々に感謝するための日だ。大人達は「親に感謝しなさい。」とよく言うが、私達学生だって「学ぶ」という「仕事」に励んでいる。つまり私達ももっとこの日は感謝されていい日のはずなのだ。

▼子どもだって、日々苦労しながら学んでいるんだ！という鋭い主張。固定観念の存在に気づかされます。

昨年度発行しきれなかった最終号です。今年度も皆さんの作品を楽しみにしています！